

企画展

大正・昭和の鳥瞰図と空から見た昭和30年代の苦小牧

ちようかんず

所詳 美術博物館
TEL (35) 25550

会期 2月8日(土)～3月29日(日)

開館時間 9時30分～17時

休館日 毎週月曜日

※2月24日(月)は開館し、翌25日(火)が休館
観覧料 一般300円(240円)、高大生200円(140円)、
中学生以下無料

※()内は10人以上の団体料金、
年間観覧券での観覧可

展示会について

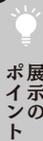
大正時代から昭和時代のはじめ、鉄道網の発達に伴い空前の行楽ブームが到来すると、鳥の目で高い所から見下ろしたように描いた鳥瞰図が、各地の宣伝と集客のために多数作成されました。一方、港の起工式を間近に控えた昭和20年代後半の苦小牧でも吉田初三郎の鳥瞰図が制作され、同30年代以降には地元の写真家の空撮により、発展する街の様子が記録されました。展示会では吉田初三郎をはじめとした鳥瞰図の代表的作家の作品約100点を紹介するとともに、旧志方写真工芸社が撮影した今から60年ほど前の苦小牧と現在の空撮写真とを対比します。

第1部

鳥瞰図

大正の広重・吉田初三郎と全国の鳥瞰図

鳥瞰図とは鳥のように高い所から地上を眺望したように表現した絵地図です。上空から見下ろして描く鳥瞰図法は、古くは「源氏物語絵巻」や「洛中洛外図」などがあります。江戸時代後期になると、浮世絵師たちによってより迫力のある鳥瞰図が作られるようになり、時代が近代に入って大正・昭和期になると、全国的な規模で活躍した絵師として吉田初三郎、金子常光などが知られています。中でも初三郎は、質、量、名声ともに鳥瞰図の第一人者として認められ、生涯に制作した作品はおよそ1600点ともいわれています。第1部では、吉田初三郎の鳥瞰図を中心に全国の鳥瞰図約100点を紹介します。



展示のポイント

初三郎式鳥瞰図の特徴

吉田初三郎(1884-1955)は、1枚の作品を完成させるため現場にも足を運んだと伝えられます。弟子たちを率いて現地に赴くと、ある位置に絵図の中心を定めて多数のスケッチを描く作業を続けました。その後、それらの絵を組み合わせて、1枚の大きな横長の鳥瞰図に構成して仕上げたようです。初三郎の作品にはデフォルメ(対象を変形させて表現すること)が強く表れています。横長の構図の両端には、本来は見えないものが描かれています。一方、中心部は写生に基づき極めて詳細に家並みや建物、街路や樹木までが正確に描かれています。

展示資料紹介

「苦小牧市鳥瞰図」
1953(昭和28)年
吉田初三郎 美術博物館蔵



前景には、扇が浦と形容された海岸線や当時の街並みが鮮やかな色使いで描かれています。遠景には苦小牧のランドマーク樽前山がそびえ、支笏湖には船がのんびりと浮かんでいます。60年以上前の様子を想像させる図ですが、現在とは違う点に気が付きます。当時港は建設途中で、予定地には想像図が描かれ、勇弘川や幌内川は港へつながる運河のようです。また、王子製紙の大型クレーンや旧苦小牧川、市の後背地に点在していた沼など、失われた施設や風景にも気が付きます。この美しい鳥瞰図は、市制施行から5年を迎えたばかりの「新興都市苦小牧」の記録となりました。